

新潟脳神経研究会第315回例会

日時：平成30年11月26日（月）18:00～19:30

場所：脳研究所1F 検討会室

1) 筋萎縮性側索硬化症における脊髄運動神経細胞の初期障害像 (20分)

中原 亜紗 (新潟大・脳研・病理学分野)

筋萎縮性側索硬化症 (ALS) における下位運動神経細胞の変性過程を明らかにするため、変性初期の脊髄前角を組織学的に検索した。ゴルジ体の断片化やcholine acetyltransferaseの濃縮が核内TDP-43の消失に先行していることが示唆され、軸索輸送障害が前角細胞変性の初期病態である可能性が考えられた。

2) 脊髄損傷後のSemaphorin発現制御と軸索再生障害 (20分)

中村 由香 (新潟大・脳研・システム脳病態学分野)

脊髄損傷は運動機能や生体維持機能の低下など、さまざまな機能障害をもたらす傷病であり、治療標的となる因子の探求が長年続けられている。しかし損傷を受けた中枢神経の再生は非常に困難であり、確実な治療法はいまだ確立されていない。本発表では運動機能をつかさどる皮質脊髄路を中心に、中枢神経の軸索再生を包括的に制御する因子の可能性について報告する。

3) 遺伝性脳小血管病の現状と今後の課題 (20分)

上村 昌寛 (新潟大・脳研・神経内科学分野)

脳小血管は神経活動に応じた脳細胞への血流供給を担っている。脳小血管病になると脳小血管機能が破綻し、認知機能低下などの神経症状につながる。脳小血管病の分子生物学的な機序については十分に分かっておらず、その解明の糸口として、単一遺伝子異常により生じる遺伝性脳小血管病の解析が注目されている。近年の研究の進歩により脳小血管病に関連した新たな遺伝子変異が報告されている。本発表では、最近の遺伝性脳小血管病に関する知見について概説し、今後の研究について述べる。
(裏面に続く)

4) ゲノム編集によるモザイク状DNAサイレンシングはDRPLAの治療として有効か？

(20分)

加藤 泰介 (新潟大・脳研・分子神経疾患資源解析学分野)

モザイク状に遺伝子発現を抑制させたモザイクトランスジェニックマウスを用いて、ポリグルタミン病の一種であるDRPLAに対する、モザイク状遺伝子サイレンシングの有効性を検討している。今回は、本研究のこれまでの解析結果と今後の展望を報告する。

どうぞ奮ってご参加ください。

(担当：病理学分野)

新潟大学脳研究所長：那波宏之